

先日の“里山”と“マンモス”の話、まだまだなんだか考えさせられている、「あの話は本当だろうか」「あの話は何のことなんだろうか」「そういえば昔のことを思い出す」といろいろ頭の中をよぎった。里山に関しては、オレ自身が知っている話、子ども時代の話が出てくる。それとオレが今、登っている山々、特に低い山ではヒトが入った気配、ヒトが管理していた気配、今は無人の山だけれど、500年ぐらい前からたくさんの人が住んでいた気配、というものを感じたり知ったりする。現在は、平野部である田園地帯はますます人口が増え、大都会となって栄えているが、ひと度坂を上り始め山間部にかかってくると、こんもりとした山は緑に覆いつくされ、かつてヒトがいた、たくさんの人家があった、こういう仕事をしていたという標識だけが立っているだけ、50年100年の歳月が、森の再生力のおかげで、まさに跡形もなくなっている。

里山の本に、牛車に炭俵を満載して、菅笠をかぶった馬子ならぬ牛子のおっさんが横を歩いている。道はもちろん舗装もしていない、水たまりいっぱい泥道。その写真を見て、「この風景は知っている 昭和20年代には まだまだこんな風景が いたるところにあった」と感慨深げに見入った。炭・七輪・薪・石炭・五右衛門風呂・かまど（竈）これらが生活用具だった。都会では都市ガスの普及が明治時代からあったらしいが、その他の地域は昭和30年ころのプロパンガスの普及まで、書き並べたこれらの器具は一般家庭の必需品だった。

不意のお客さんに母親が、「ちょっと お茶だすので 湯 沸かして」と子供のオレに向かって叫んでいた。七輪を出し新聞紙をちぎり丸めて入れる。次に割りばしぐらいの細い薪の屑を乗せマッチで火をつける。薪の屑にちよりに炎が出だすと、火消壺の中のカラケシを炎の上に乗せる。＜カラケシ：どうもこれは大阪方言のようだ。炭や薪の燃えているものを壺に入れ酸欠にして火を消す。次回に着火が簡単、すぐに燃え出す。京都では、五山の送り火の燃えカスなるカラケシを祀り、魔除け厄除けとしたらしい。＞お茶を入れるための湯を沸かすだけなら、このカラケシだけでじゅうぶんに湯が沸いた。「沸いたよ～」とあとは母親の仕事だった。米を炊く、おかずを作るには竈だ。これらもカラケシの炎の上に、薪を乗せ、煮炊きをするための火力を得て台所作業をしていたようだ。五右衛門風呂は石炭で炊いていた。ある程度の炎を得るまでは同じ作業だけれど、薪の代わりに石炭を燃やしていた。黒い石炭が囲いの一角に積まれていた、それをスコップですくって、一二ハイ釜に掘りこんだ。薪は割ったものがひと抱かえ針金で括ってあるのを薪炭屋が配達していた。それを小さいマキワリで細く砕いて使っていた。マキワリはよく画像で見る、丸太を割るような豪快なものではなく、あらかじめ割ったものを、さらに小さく細くするのだ。炭は冬の暖房用にしか使わなかったように記憶する。火鉢に炭を入れ手をあぶっていた記憶があるが暖かいものではなかった。（ヒトに言うと笑われるが 学生時代 ストーブと給食の経験がない 小学生時代は炭の入った火鉢 それ以外は震えていた）石油ストーブの暖かさには驚いた。練炭・たどん、もあったねえ。

山の本は人々によって使われた、知恵を出し合って、規則を決めて、山の恵みが絶滅しないように使いあつたようだが、はげ山といわれる山々もけっこうあつたらしい、今のようにならないうちでいい。

マンモスの話：最近氷の中、永久凍土の中からマンモスが掘り出されているらしい。1万2万年の眠りから覚めた状態で見つかるらしいが、その胃袋を見ると、植物が入っているようだ。マンモスというのは、雪の上、氷の上をのし歩き、毛皮を纏った土人が槍や斧でマンモスを攻撃するイメージが残っていた。ところがマンモスは象の仲間、大きさも現行の象とそう変わらない、むしろ小さいものもいたらしい。アフリカやアジアの象は、草や葉っぱを食い、水を浴び、のそり集団で歩いている。氷河期のシベリヤやアラスカも当時は草原だという、草がたくさん生えた草原で彼らは生活していたという。氷河期のその地が、草の生えた草原だとはと、首をひねる話だけれど、大型草食獣にとって、草や木が茂っている、水がある、これは必須の生活条件ですよねえ。それと、今のアフリカ同様、これらの草食動物が豊富なら、これらを食う肉食動物もいたのしょうね。

◎陸橋：海の水が干上がって、と思っていたがまさにそうでした。ただ、この言葉に＜生物地理において＞と注釈がある。同じ生物が海を隔てた場所で発見された場合、かつてそこが陸続きならば、分布の説明ができる。

◎シベリアとアラスカ間のベーリング海峡が1万年前には陸続きだった。

◎宗谷海峡 55M・対馬海峡 130M・津軽海峡 140M 2万年前には水位が120Mも低かったので、陸橋があった。

生田美智子講演<抑留された女たち-満州からシベリアへ>同窓生の講演なので、カレンダーには印がしてあった、もうすぐだ、明日だとわかっていた。当日この暑さ、さあ着替えていこうとするもなかなか体が動かない、先日の直子さんの展覧会といい、今日の講演といい、「この季節はだめだよ」とぼやきがしきり。アトリエの中よりも外へ出た方が涼しい。室内にいる時は、上半身を裸で失礼している、温度計が35度前後になると、突っ立っているだけで、汗がつつわってくる、「さあ出かけよう」とすぐにはシャツがはおれない、とまたまたぼやきの続き。

シベリア抑留の話、山崎豊子の伊藤忠商を書いた小説に、“瀬島龍三”という人をモデルにした主人公が出ていた。35歳で関東軍参謀佐官であった彼が、ソ連軍に拘束され11年間シベリアにいたという。小説の中に、当時の抑留者の資料や手紙が載っていた。小説の筋を追うあまり、抑留された人々の手記や手紙はあらかじめ飛ばして読んでいた。このあらかじめ飛ばして読んでいた部分をもう一度改めて読んでみたいと思うが、本はもう手元にない。当時資料や手紙を小説の中で使用したということで、作家自身が訴えられていたという記憶もある。

もう一つは、“香月泰男”という画家の事。調べると瀬島と同年生まれ、芸大では藤島武二教室にいたという。土壁風の色とマチエール、イエローオーカーの絵の具に砂を混ぜキャンバス、それをナイフで塗っていた。その上に黒っぽい絵の具で、シベリアの抑留生活の絵を半具象的に描きこんでいた。相当前に大きな回顧展を見に行った記憶がある、好きな絵描きだったが、今から考えれば、戦後復興が進み爆発的な好景気で浮かれた世の中、苦悩苦渋の表情が、おぞましい体験が、その浮かれた一般大衆に、ピリリとした清涼剤の主題だったのかもしれない

そのほかにも、以前図書館でシベリア抑留時代の文と絵を描いている本を発見したが、パラパラめくって終わった。ここで話は脱線して、香月に関する面白い話を。老松町の友人の画廊でオレの展覧会の最中に、一人の若者が訪ねてきた。画商は客を奥に通して商談していた。「香月を買ってくれ」「15万円？で買ってくれ」「即決してほしい」と言ったらしい。画商は脂汗を描き、「本物なら 大儲け 偽物なら 15万円の損」画商は15万円を払った。翌朝仕事仲間の香月に詳しい画商に見せたら、画商氏、「アカン」の一言、残念ながら15万円の損をしたようだ。これもまた老松町が浮かれていた時代、絵が、骨董が売れまくっていた時代だった。画廊、画商、古物商は「センミツ」という言葉で表されるように、本当の話は0.3%の確率しかないということだ、と言っていた。話は続くが、絵が投資の対象、「この絵を買っておけば将来 値上がりするよ」というようなフレーズがあたりまえの世界、絵が金・金・の世界、これはおかしいよ、よくないよ、こんなことを言っているから、文化にそっぽを向かれるのだ。ほかのアートの世界ではありえない話、こんな言葉が、やり方が人々の不信を招き、絵が嫌われる時代になってしまった。

生田さんの講演内容は、講演会のここだけの話にしてほしい、文章等は他に出さないでほしいということで、シベリア抑留の関連話、オレが調べた話を紹介します。

◎ラーゲリ-収容所：日本では強制収容所として使われている。ソ連政府は、日本人の軍人、軍属、開拓団50~60万人をシベリアに抑留し、ソ連の戦後復興の労働力として使用した。一割の日本人が現地で亡くなった。

◎独ソ戦。ドイツ人600~1000万人が死亡。ソ連人（民間を含め）2000~3000万人が死亡。戦争初期ドイツ軍に捕虜となったソ連兵500万人は、強制労働でほとんどが亡くなった。ドイツの話は、ユダヤ問題を含めずさまじい。

◎つるし上げ：ラーゲリでは赤化教育がおこなわれ、共産主義を礼賛し天皇制や日本の体制を批判する、反対者をつるし上げる、本当にロープにかけて寸前までつるし上げる、なんてことがあった。<産経>

◎ソ連兵による、強姦、殺戮、暴行、強奪、ラーゲリでの極寒、栄養失調、重労働、死亡という文字が躍る。

◎日赤看護婦養成所を卒業した者は、平時は病院に勤務するも、戦時招集状（赤紙）で招集された。日赤以外に軍の看護婦制度もあったようだ。看護婦の証言で別に従軍慰安婦もいたようだ。

◎満州にいた日本人、軍人以外の日本人、敗戦までは裕福に暮らしていたらしいが、敗戦後は大変だったらしい。戦後すぐ生まれのオレのまわりには、満州、中国、朝鮮、台湾からの引き上げた、という方々が多い。

◎道を迷い、車を2度ほどバックさせて、目的の登山口にやってきた。高見山にいくつかある登山口のうちのひとつ、桃俣登山口だ。10台ぐらい止まれる広場、10~15Mぐらいの清流が地面よりちょっと低いところ、水音をたてて流れている。高角神社、鳥居があり階段があるが、祠は小さい。トイレがあり、湧水がちょろちょろ流れている、BBQのあとが散乱している。宇陀郡御杖村桃俣という。下りたら、水を汲んで帰ろう。

◎10:00 出発。大阪を7時に出発したが、三重県境のこの辺りまでは3時間かかってしまう。室生寺や曾爾高原が近所らしい。タイツに半ズボン、上は半そでシャツ、弁当に行動のパン、水は2リットルある。以前より、一日前にこの山の予定を入れていたが、迷走台風が一昨日に、まさにこの辺りを通過し、一昨日、昨日とだらだら降ったのだろう、車の道も登山道もまだまだ濡れている、葉と小枝が散乱している。大きな枝は折れていないが、青々した葉っぱが登山道の上に散乱している。この道は、ほとんど人が少ないらしく、ヒトの姿はまったくない。

◎今日はキノコのオンパレード。せんべいぐらいの大きさ、キノコがいくつか笠を開けている、いかにも毒々しいやつから、きつね色に旨そうなやつまでであるが、キノコばかりは食ってはいけませんぞ。

◎40分ほど登ると、尾根道に出た。杉や檜の植林が少なくなって、いよいよブナ君が現れた、若々しく元気な奴だ、盛夏の今、葉を青々天に向けている、山の緑は真っ盛りだ。一昨日、昨日の雨、山道を右に左に、葉や枝を巻き込んで流れ流れた模様、まだ少し台風の影響が残っているのか、涼しい風が心地いい。おお立派な木「ミズナラ」これがミズナラか、よく見る樹だ、「木が弱ってきたら マイタケ が生える」同行の久子さん、木と花は詳しい。

◎イエローオーカーの幹の木は、ナツツバキ似ているが違う、このつるりとした肌の木は、「ヒメシャラ」。アカマツがある、ひょろり細い樹々も競って立っている、空は淡く曇っている。

◎出発から1時間ぐらいで天狗山にやってきた。ほとんど標高1000M、目的の高見山が1200M、これからはだらだら登り下りが1時間ほど続くようだ。

◎今日は珍しく首にタオルをひっかけている、「そうだ いっぺん タオルをひっかけて 歩いてみよう」と朝からこぎれいなタオルを首にひっかけ、タオルの端っこをシャツの胸に突っ込んでいる。実はこのスタイル、山登りの定番、スポーツをやる人の定番なのかもしれないが、オレはしたことがなかった。初めてのタオル、実にこれはいいねえ、いつものミニタオルでは、夏場は、一時間もすると使い物にならないぐらいに、汗で濡れてしまうからだ。

◎ついでに登山時のいつものスタイルを紹介します。オレのスタイルは、左のサイドポケットに、トイレトーパー・ミニタオル・リップクリーム・ICレコーダー。左のサイドポケットに、財布を入れている。左右のポケットはその都度何かを入れているかも、ぐらいだ。ウエストポーチを必ず持っている。ここには色々入っている。行動水・一眼レフカメラ・箸・歯ブラシ・ミニ包丁・スケッチブックに筆記用具、なかなか便利にしている。

◎向こうのほうにポコリ、目的の高見が見え隠れする。不思議だねえ、この季節に風が冷たい、先ほどからの登りで濡れた身体に、なんだか冷たい風が吹き込む、尾根道だねえ、まだ台風の名残かねえ。

◎てっぺんにはりっぱな神社がある。三重県側から1時間とはいえ、大きいいくつかの石、祠を作る建築材料、たくさんの人が、えっちら担いで上まで持ち上げたのだろうね、まだヘリコプターなぞ、ない時代だ。

◎二組、三人の人がいた、われわれ含めて五人、穏やかな芝生張りのような草むらで弁当を食った。玄米のご飯に梅干と塩昆布。野菜を炒め、玉子焼きを入れた。最近動物性たんぱく質を摂るようにしている。どうも今までのふらふらは、栄養失調のようだった、玉子を1.2個、肉を一切れ、これでなんとかふらふらはなくなった。今の時代に栄養失調とはお笑いだね。冷えたスモモをいただいた、甘くて旨い、これは最高なり。

◎下りの時間になると、先ほどの涼しさ、風の冷たさはどこに行ってしまったのか、8月の盛夏の気候の戻ってきた、穏やかな日照り、温かい風、もう台風の気配もなくなった、ということだねえ。

◎高見山は2年前まで知らなかった。「霧氷で有名 冬には たくさんの人がやってくる」とは聞いていたが、どこから登るのか、何時間かかるのか知らなかった。2年前トンネルを抜け三重県側の、大峠から登った、たった1時間で着いてしまった。それから二度同じルートで来たが、みなさんが登る温泉からは一度も来たことがない。ここも冬にまた来てみたい、霧氷がきれいだそう。霧氷と樹氷の区別を忘れてしまった、違っているかも、だ。

盛夏の今の時期、TV画面を見ると、「お化け屋敷」だの「妖怪」などという言葉が飛び交って、面白おかしく笑っている、なかには本当に怖がって泣きじゃくる子どももいる。夏はこのたぐいの話が流行るのだと苦笑しながら、鬼や妖怪のことを考えている。山に入ると、なんだかこの辺りは、わけのわからん奴、鬼や妖怪とは言わないけれど、そんなたぐいの奴がいてもおかしくない、居るかもしれないというような場所がある。目に見える、肌で感じるというのではないけれど、奴はいる、そっと隠れている、オレの前には出てこない、だけど居るかもしれないと、ちょっと怖がらせすみません。

馬場あき子著<鬼の研究>またまたこの本を借りて読んでいる、よほど気に入ったのか、これで何度目か、とにかく面白いが、読んであくる日には忘れてしまっているという、ていたらくながらである。ヒトの作った怨念やら滑稽やらの産物、架空のモノではあるが、架空ではすまされない怖さ恐ろしさが感じられる。夜になり闇が訪れ、何かか蠢きこちらに向かって見つめているだけなのか、攻撃を仕掛けてくるのか、鉄拳や刃物が向かってくるのか、臭気やおぞましい呼気が向かってくるのか、チト気持ちが悪い、これは怖いと言いながら、お化け屋敷の話である。

出雲風土記：<古老の伝へていえらく、昔ある人、ここに山田をつくりて守りき。その時目一つの鬼来たりて、つくる人の男を食ひき。その時、男の父母、竹原の中に隠れて居りし時に竹のは動けり。その時、食はる男、アヨ、アヨと言いき。>阿用郷は現在の島根県大東町あたりで、阿用の地名も残っている。八岐大蛇（ヤマタノオロチ）で有名な揖斐川に合流する流域で、モリブデンを産出する大東鉱山（S48 閉山）などがある。<ジジババと息子が農作業をしていると、一つ目の鬼が来て息子を食った。若者は鬼に食われながらアヨと言った。ここの地名は阿用。>

風土記とは713年に太政官が発した風土記編集の官命により、出雲の国司が編纂を命じ、20年後に、天皇に奏上された。1) 地名に良い名をつけなさい。2) 土地の産物をあげなさい。3) 土地の良し悪しを記しなさい。4) 地名の由来を述べなさい。5) 古老の伝承を書き記しなさい。

先生：日本に最初に登場する鬼が一つ目であることは、日本の鬼の原型を考えるうえで大変参考になる。「倭人伝」などに記された卑弥呼のように<鬼道>に仕える巫女の権勢がいち地方を風靡する傾向の中で、神儀にえられたしるしとして片目をつぶされた一つ目の男が、ある時よこしまな暴力をもって不意に民衆の収穫を奪い去ることは考えられぬことではない。阿用郷の事件は抵抗した若い農民が殺されてしまった惨劇であるとの想像も可能である。

柳田国男：一つ目小僧：先生ここで、柳田国男の詳しい調査を紹介：一つ目小僧は多くの「おばけ」と同じく、本拠を離れ系統を失った昔の小さな神である。見た人が次第に少なくなって、文字通り、一つ目を絵に描くようになったが、実は一方の目を潰された神である。大昔いつの代にか、神様の眷属にするつもりで、神様の祭りの日に人を殺す（人身御供）風習があった。おそらくは最初に逃げても捉まるように、その候補者の片目を潰し足を一本折っておいた。そうして非常にその人を優遇しかつ尊敬した。犠牲者のほうでも、死んだら神になるという確信がその心を高尚にし、能く神託予言を宣明することを得たので勢力が生じ、しかもたぶんは本能のしからしむところ、殺すには及ばぬという託宣をしたのかもしれない。とにかくいつの間にかそれが廃止され、ただ目を潰す式だけが残った。

祭りの日に、神への“いけにえ”として人を殺す、ヒトをささげる、こういうことがあったのかとあらためて驚く。生贄とは、動物なりを捧げると思っていたが、ヒトも捧げたらしい。捧げられる方は、犠牲者であると同時に、選ばれたもの、神に近づくもの、崇められるもの、としてまわりの人々から尊敬され、畏敬の想いで見られ、執行の日まで華やかな生活を送ったとも書かれている。農耕生活にはいった人々の間に、狩猟時代に行われていた荒々しい神事の存在、その荒々しさが神祠の拠点を持つ山の中に孤立化していく。

人が何かに昂揚する。「君は 選ばれた 人だ」「君こそが 我々のために 立ちあがって くれる人だ」「君しかない」「後に残った者たちの 幸せは 任せてくれ」こういう言葉に励まされ、諭され、自身が高揚し、神がかり的な精神状態、そこまでいけば、「わたしは なんでも いたしますぞ」「みなさんを 代表して どこにでも いきますぞ」こういう話は昔だけの話ではない。厳かなところで、厳かに儀式が行われる、本人はもちろん、まわりの人も華美で厳かな服装に身を包み、しんとした中お神酒がふるまわれ、静かに時間が経っていく、他の人にはできない任せられない、私の仕事だ、重労働も、羞恥の技も、死もいとわない。こういう場面がたくさんあった、こういう人たちがたくさんいた、と想像がつく。現代社会で暴力団の上役が変わって、「私がやりました」と身代わり自首をする半人前のお兄さんの話は、メリットとデメリットがはっきりしているので、こちらに置いておくことにしましょう。「この重労働は わたしが やりましょう」と生きがいに燃えて、がんばる人はたくさんいる。ピラミッドも、巨大古墳も、山の上の大きなお寺もそんな力が働いたのかな。「私が 犠牲に なりましょう 泣きましょう」「死さえ いといませんよ」こういう人もいたんだろうね、これが社会なんだ、村なんだ。

本の中にたくさんの鬼が出てくる。虐げられ、蔑まれ、裏切られ、身体全部が鬼になっていった人。人と人の争いのはて、負けてしまった側の人たち、経済戦争のはて、負けてしまった側の人たち、古来日本の社会にある差別化された人たち、悪いこと、盗み、詐欺を本来の仕事とする人たち、いろいろ考えられる。歌舞音楽、アート、スポーツの世界でも成功した人と、そうでない人とも、そういうことがあるかもしれないねえお、自戒。

土蜘蛛の話：オレは知らなかったが、一般に今日知られている土蜘蛛は、歌舞伎や能のそれであり、塚にこもる妖怪のイメージが強い。折口氏は、「オニとは大人（おおひと）のことであり 征服された先住民のことではないか」と言っている。風土記にもたくさん出ているらしい。様々な形で土地に根をおろしていた先住民たちだが、凶悪な反逆というようなものはほとんどなく、天皇巡行に敬意を払わず知らぬ顔をしているとか、地盤を守る意志が強固であったとか、要するに大和朝廷の発する一方的な政令に承服できなかった地方有力者の貌がつよい。

先日も読んだ、縄文時代の本の中に、縄文人が住んでいた竪穴式住居は、地面に柱を建て、その上に屋根があるが、簡単な屋根の上に土をかぶせ、まるで穴倉のような住居であった、土蜘蛛という言葉はそこから来ているのではというようなことも書いてあった。確かにいきなり、都の宮殿のような建造物に誰もかれもが住めるわけでもなく、都の宮殿のそばには、洞穴に見えるような竪穴式住居もあったのでは。都から離れた地方では、カエルもサルも食う、都の奴のいうことは聞かない、家来にはならない、上納もしない、そんな奴らがたくさんいたはず。都の軍隊が押し寄せ、やつつけられ、クモやサルや妖怪と蔑まれ、殺され、奴隷、下僕にされと、なんだか目に見える。

◎アタ賊土蜘蛛がおり、穴居するがゆえに「賤しきなを」賜り、「土蜘蛛」と呼ぶようになった。

◎女土蜘蛛の中には、明らかに巫女的横顔を持ったものが多い。魏志倭人伝の中に「卑弥呼 鬼道で・・・」卑弥呼も土蜘蛛と同じような人だが、次第に力をつけていったのでは・・・。

◎日本書紀に「山に悪（邪）しき神あり 野良にかだましき鬼あり」

盗人の話：これは奥が深い、時代劇では、大屋根の上を走る黒装束、御用と書いた提灯がまたたくという画面が目には浮かぶ。現代では、指名手配の張り紙をよそに、静にひっそり暮らす奴、世界の歴史の中には面白い話がたくさんありそうだ。それこそ、盗人も、武力、権力を持てば殿様じゃないのかね。

先生：王朝は繁栄した、桓武以来、三百四百年にもわたる繁栄である。その裏に莫大な犠牲的暗黒を含むのが常である。摂関貴族政治の背景には、その繁栄の数十倍の部厚さをもって犠とされた人々の生活があったことは言うまでもない。平安朝には「女盗賊」もめずらしくなかったらしく、今昔物語には、オレの好きな「人に知らぜらる女盗賊のものがたり」「検非違使の別当隆房家の女房強盗の事露見して禁獄の事」などがある。古代の物語集、読んでみると面白い話がたくさんある、徐々に読んでいきましょう。

最近コーヒーを入れている、豆を買ってきて、ミルで挽き、ちょろりちょろりと湯をたらし、コーヒーを入れている。「入れる」は、「煎れる」「淹れる」とあるそうだが、「入れる」でいいそうだ。始まりは二三年前にアトリエでお茶の時間、「入れた コーヒーが 飲みたい」と聞いた一言でした。「コーヒーを 入れる道具 ぐらいいはあるよ」とさっそく近所のスーパーで粉を買った、どれがいいのかわからないので、中ぐらいの程度の値段のものを買って入れた。「入れたコーヒーはおいしい」と評判がいい、なんだこんなことか、こんなことでいいのか、と始まった。コーヒーにうるさく、凝っている方々の話を聞いてみると、「焙煎したての豆を買うこと」「ひと月位で飲んでしまうこと」そんなこんな、さほど難しくはない。粉も豆もいくつかの場所から買っていた、値段も安いものからキリがない、そうこうするうちに近所にコーヒー専門店ができ、最近はそこで極普通の豆を買っている。300円/100Gぐらいいと安い方だ。入れ方はネットの動画を見て上手くなった、達人の皆さんが実演してくれる、一人一人が言うこと入れ方に違いはあるが、オレの入れるコーヒーも、まずはなくなってきたのではと思っている。ただ、ひとこと申し上げることは、「味 に関して 相変わらず 音痴である」。ひとことで終わらないのが、悪い癖、音痴を並べると色々でてくる。まず、音楽才能はゼロ、運動神経も相当に低い、山は歩くだけなのでなんとかこなしている。酒も永らく飲んできたが、日本酒、ビール、ウイスキー、盃に入れ飲み比べれば違いはわかるが、それがどうした。いろいろな美味しいものも、すべてが美味しい、ただ、「こいつは まずいいねえ」と絶賛するやつが時にはある。

今年は3回の展覧会がある。3月の新大阪、5月の愛媛県伊予市の二つは終わったが、次は11月の茨木市立のギャラリー、続いて来年の3月には新大阪での展覧会がある。5月の愛媛県伊予市が終わった前後は雑用に追われ絵がなかなか描けなかった。今は毎日のようにサインを入れている。サインを入れるということは、お笑ください、「一丁あがり」です、できあがります。今までは描けない、描けない、と腕を組んで天井を見上げている時間が多かったが、「ええい いいかげん 仕上げていこう」という心境に、「こだわるな 吟味するな 躊躇するな」とボケ老人の心境に、というわけで筆が進む。何度も言ってますが、絵にはサインと日付を入れる、正月元旦なら010117（最後の17は2017年の事）。これらをデジタルカメラで撮影し、パソコンに入れて整理する。日付がナンバーになり同じ数字がふたつと無いというわけである。

床に1センチの合板を並べ、綿布、麻布をタッカーで貼り、白のキャンバス用下地材を2回塗る。10・6・3号ぐらいいの小さいものが並ぶ。隙間に20・30号のキャンバスを置く。いつものように大柄の筆、書道用大柄の筆、ナイフ、スクレーパーなどで描いている。一つの絵の具を入れ、乾いてから次の色を入れると発色がきれい。一つの絵の具を入れ、乾かないうちに、次の色、その次の色を入れていくと、画面が躍りだし生き生きしてくる。こんなことを繰り返していると、なかなか絵をほったらかしにして外に遊びには行けない。最近はみなさまとの付き合いもおろそかになって、出かけなくなった、そのぶん、オレの展覧会の観客動員数も減っています。というのは、普段から一緒に遊んで、「今度の展覧会には 見にきてね」と言えば見にきて下さるが、その一言がないので、仕方がないねえ。毎日、昼頃に河原に行って2時間ほど過ごす、祖食事は三食を旨くいただく。こんな生活の繰り返しです。

書の話：「岡村さん 書 書いてみなさい」「なんでもいいんです 字でなくても」そう言われて、1.8Lの墨汁、巻いた紙、数本の筆を渡された。書は憧れの作業だけれど、今まで習ったこともない、師についたこともない、イロハを知らない、約束事、紙も筆も墨も知らない、なんでもいいと言われても、と不安だったが、「なんでも いいんなら」と書いてみた。この「なんでもいい」「どうでもいい」という言葉は効きますねえ、この言葉によって、思考というよりも感性のスイッチが切り替わり、絵を描く感覚で、筆を飛ばす、墨を置く、筆を突くように書く、筆の腹でこする、筆の先で細い線を躍らせる。「なんだ これで いいのか」「こういうことで いいのなら オレにでも できる」という感じで楽しんでいるが、「なんでもいい」「どうでもいい」という考え方、自分がない分ぐらつく。くだらない言い方をすれば、理論武装、そんなこんなの構築ができていないので、「どうだ」という自信は持てない。そのうち、自分の姓名ぐらいいは面白い字で書けるようになれば最高である。

何年か前から今昔物語を読んでいると、宇治拾遺物語という名が時々出てくるのを目にしていたが、今昔物語と同じような物語集だと思っていた。宇治拾遺物語をいくつか読んで、「これは 今昔物語と似たようなものなのか？」「面白くない内容があるねえ」ぐらいに読んでいたが、ちと、エロい話に突き当たり俄然張り切って読んだ。調べると、宇治拾遺物語は、130 ぐらいに作られた物語集で、今昔物語の 110 より 200 年ぐらいの時間差があるらしい。宇治大納言源隆国が編纂したらしい。今昔物語など先行する物語集と共通話題が多いらしい。仏教、世俗、民間伝承等のテーマだそうだ。編纂後、漏れていた話などを拾い集めたということで、拾遺という語が付いたらしい。他に比べ、猥雑でユーモラスな部分が多いらしい、とこれはいい。

★道命阿闍梨於二和泉式部之詐一読経五条道祖神聴聞事。

◎道命（どうみょう）が和泉式部の家で経を読んだら五条の道祖神が聞きに来た。

★今はむかし。道命阿闍梨とて傳殿の子にいろにふけりたる僧ありけり。和泉式部にかよひけり。経をめでたくよみけり。

◎藤原道綱の息子で、道命阿闍梨という色ボケした僧がいた。お教を大変な美声で読むことで有名だった。和泉式部とただならぬ関係だった。

★それがいづみし*きぶがりゆきてふしたりけるに。目さめて経を心をすましておよみける程に。八巻よみはてゝあかつきにまどろまんとするほどに。人のけはひのし*ければ。あれはたれぞととひければ。をのれは五条西洞院の辺に候おきなに候とこたへければ。

◎経を読む口実に、和泉式部のもとに行き、同衾し、その後寝入ったが、起きだした。読み始め集中し法華経をすべて読んでしまった。外はもう明るくまどろむ頃になっていた。人の気配がするので、「誰であるか」と道命が問うと、「私は 五条西洞院に住む 老爺でございます」と答えた。

★こはなにごとぞと道命いひければ。との御経をこよひうけたまはりぬることの生々世々わすれがたく候といひければ。道命法華経をよみたてまつることはつねのことなり。などこよひしもいはるゝぞといひければ。

◎「ご用は」と道命が尋ねると、「お経を 今日 聞かせていただいたこと 終生忘れないでしょう」老爺が答える。「法華経を読み上げることは 毎日なのに 何故そのようなことを言われるのか」

★五条の齋いはく。清くてよみまいらせ給ときは。梵天帝尺をはじめたてまつりて聴聞せさせ給へば。おきななどはちかづきまいりてうけたまはるにをよび候はず。こよひは御行水も候はでよみたてまつらせ給へば。梵天帝尺も御聴聞候はぬひまにて。おきなまいりよりてうけたまはりてさぶらひぬるとの。わすれがたく候なりとのたまひけり。さればはかなく「さい」よみ奉るとも。

◎老爺が答える。「身を清めてから お経を唱えなさるときは 梵天様や帝釈天様などが 来られて 聞かれるのでこの老爺なぞ どうていあなた様に近寄って 拝聴できません」「今宵は 行水もなさらなかったので 梵天様や帝釈天様などが来ず この老爺がやってきたわけで 本当に忘れがたい思いをしました」

★きよくてよみたてまつるべきとなり。念仏読経威儀をやぶることなかれと。恵心の御房もいましめ給にこそ。

◎お経は身を清めて、唱えるもんだ。「念仏・度胸。四威儀を破ること勿れ」と恵心僧都も言っている。

町田康先生の訳と解説、下品だけれどよくわかる・・・：五条西洞院に住む老爺とは、京の五条の道祖神だと道命にはすぐわかった。感激した道祖神が、「あなたの読むお経は尊い。インドからわざわざ、帝釈天様や梵天様が聞きに来られる。だからわしら下っ端のものなぞ同席もできない。だけど今日は、あなたが、きれいな女の人とぐしゃぐしゃして身体も洗わず、口もゆすがず、お経を読み始めた。すごい人たちも、お教が始まり、来るつもりだったが、それに気付くと、「うわっ きたなっ」と帰ってしまったので、私は好機到来、慌ててやってきたのです。女とやりまくった汚い身体で、尊いお経を読んでくれてありがとう。本当にありがとう。

◎朝7時、同道の福田さんが、車で家まで迎えに来てくれた。80Lのザック、クーラーに凍らせた肉と野菜、靴セット、風呂セット、たくさん積んで出発。同じく7時に豊中を出発する衣川・裕子組と8時に菩提寺PAで会い、積もる話もそこそこに、次はどこ、次は小黒川PAで昼食と逢瀬を重ね、そこから別行動になった。衣川・裕子組は、唐沢鉱泉一泊、天狗岳に登り、ひこう船に二泊などして帰阪だという。我々は諏訪南ICから美濃戸口に向かった。途中、食料調達にスーパーにより行動食のパンを調達。

◎2:00に赤岳山荘駐車場に到着、迎えてくれたおじさんに2000円/2日分を払う。昔、山下さんが、「ここなら無料で止められるんだよ」と言っていた。予定では3日間だが、同行の福田さんの腰の様子から、ひょっとして明日にでもひき返すことになるやもという考えだった。昔、活躍した80LのLL-beanのザックにシラフとテント、床シート2枚、炊事道具、衣料等を詰め込んだ。普段は相・前コンビ様をお願いしている食料調達も、オレが考えた。二晩分の肉を冷凍、野菜類のカット、調味料の数々・・・ふた晩とも、まずくも無く、量もそれなりだった。「どっこいしょ」と担ぎあげ、「行けるだろう」と出発、すぐに分岐点、「南沢」行者小屋「北沢」赤岳鉱泉、左の南沢を進む。

◎今回の山行は、一カ月前の十三での飲み会で衣川・裕子・福田・オレが集い、衣川さんから「8月27~31日の予定で北八ヶ岳を予定していますが 行きませんか」と誘われた。いろいろ都合を巡らせ、結局衣川組はひこう船二泊を含む北八ヶ岳方面へ、岡村組は八ヶ岳鉱泉を基地に赤岳・硫黄岳に登ろうということになった。一日で赤岳・硫黄岳のぐるり一周を考えたが、70歳の体力をおもんばかり、それぞれをひとつずつ登ることにした。

◎20年ぐらい前、山下さんのトラックに乗せてもらった道、美濃戸口から最後の小屋の駐車場まで、歩けば1時間、車なら20分。今回は黒い高級乗用車、「タイヤが一本10万円」と聞くとあいた口が塞がらない状態なれど、ゆっくり、腹をこすらないように走った。山下さんと知り合ったのがその時だった、「乗らないか」の一言で、澤山・河瀬・和田・オレぐらいだったかな、小さいトラックの荷台に乗せてもらって、歩けば1時間を稼いだ。当時の山下さん、「猿のような人だ」と驚くくらいに身軽でテキパキ、行者小屋の上の方にテントを張っていた。我々もテントを張り、翌日は快晴の中、阿弥陀岳・赤岳とまわってテントに帰ったように記憶している。

◎2時間ぐらいなら、重い荷を担いで歩けるだろうと思ったが、ズシリこたえる。林道が少し続き小休止、あとは多少の登りがある道なれど、川を挟んで右に左に橋を渡り、3回も休んでやっと小屋が見えた。

◎それでも、コースタイムの2時間強でテント場に到着。八月最後の日曜日、先ほどまでテントがはってあったと思われる場所がたくさん空いている、荷を担いだ人たちが三々五々帰っていく。赤岳が霞んで見える、右側が大きく崩れている、崩れが前からあったどうかさだかではない。

◎小屋でテントの受付、「一日ひとり1000円 連泊でも 一日づつ支払ってください」というシステムだそう。テントを張り、荷をかたづけ、「さあ どこで食おうかな」と見渡すと、デッキに机セットが6本ある。「ここで飯を食べてもいいのかな」「どうぞ火を焚いてください」ということで、二日間の朝晩、屋根のあるデッキで椅子と机で食事、しかも9時までライトが灯されている、ここはいいところだ、快適だ。

◎6時前に起床。朝食は昨夜の野菜鍋に、ご飯を入れてオジヤ、「旨い」と完食。「今日は 赤岳」ミニザックに行動食のパンと2Lの水。雨具の上下を入れた。この1,2年、時々、足がつる。今までそのようなことはなかった。山仲間の何人かが、「足がつる」「上に行くと頭が痛くなる 高山病だ」「登りで 疲れ切って 食欲がない 飯が食えない」というようなことを訴えていたが、オレ自身はそういうことが一度もなかった、いつもまったく快適だったが、足がつるようになった。「ポカリスエットが効くよ」「芍薬甘草湯が効くよ」と聞いていたので、粉のポカリスエットを持ってきた、それをペットボトルに入れ、水を入れた。この水は旨い。

◎1時間足らずで、行者小屋についた。雲が多く雨は降りそうにないが、天気予報が言っていた快晴ではない、涼しい、日照りもない。何年か前の積雪期、朝の9時ごろにここに来ると温度計がマイナス10度だった。赤岳鉱泉で一人でテントに寝たが、さすがに寒い、ガスを焚いて暖をとろうとしたが火が点かない。ボンベをシラフの中に入れてしばらく温めるとガスが点きだした。そのことを小屋で話すと、事情通の人がいて、「厳冬期は 灯油ストーブだよ プロパンはだめだよ 灯油なら相当冷えても 大丈夫だよ」という。

◎福田語録：「山を歩く 命をさらす」「自分を取り戻し 活性化する それが命 それが人生」

◎同道の福田さん、6月の大峰二泊から二度目の山。本当に行かれるとは思っていなかったが、同も山がきにいったようである。今回はザックが重いこともあって、熊の鈴を外してきた、大きな音がリンリンなって喧しいぐらいだけれど、一人で寂しく歩く時は頼りになる鈴だ。なぜ鈴の話かという、福田さんは空手の名手、学生時代に相当がんばったようだ。昨今、「空手の師範 熊と格闘し 熊を撃退」というニュースが続いたように思う。もし熊が現れたら、突きと蹴りで熊を撃退ということを目指したからだ。

◎「あの ゴツゴツした てっぺんまで 2時間で 行ける さあ 赤岳に登りましょう」歩き出した、途中で阿弥陀岳との分岐があるがそれを左に、赤岳方面に森林帯に行く。「30分で一本」休憩をとりましょう、それで登ることにした。2本目ぐらいからもう階段がでてきた。積雪期は階段しか見えない、今の季節はまだまだ階段が始まるこのあたりは、樹々がいっぱい、いつも思うが、雪が降ると、雪が積もると、景色が一変するんだねえ、まったく違う場所に思えるんだよねえ。左は石の壁、黒い酸化鉄の石なのか、昔来た時に、ここで岩登りの連中を見たことがある、凍り付くような寒い中岩にへばりついていて、オレはあれはだめだ、岩はクワバラである。

◎もう少しで乗越という地点、ヘルメットをかぶった老夫妻、奥さんの方が相当ばてて座っておられる。「あれが頂上ですね」「いやいや あれを左に曲がって 岩の道を まだまだですよ 乗越で引き返されたらは」と話していたが、我々が山からおいて休憩していると、その老夫妻が来られ、「いやあ 登ったよ 根性で登ったよ 気持ちいいよ」と笑っておられた、乗越手前で見た疲れ切った顔から、達成感のあるふくよかな顔になっていた。

◎いよいよ岩の登り、慎重に登っていく。50歳代の時、ここを一人で登った。美濃戸口で車中泊をして登っていると、自衛隊の団体が登っている、登山も訓練だそう。「負けるものか」と抜きつ抜かれつ登った、彼らは硫黄まで行ったかな。今回の山行、赤岳・硫黄岳の一周を考えた、コースタイムを調べると7時間ぐらい、なんとか行けるか、行けないか試算をしたが、我々の歳を考え無理は避けた。

◎予定通り山頂についた、狭い山頂には10人ぐらいの人がいた。立派な祠があり、標識があり、三角点がある。天気が悪くなりだしてきた、雲が出てきた、風が吹いてきた、空が薄暗くなってきた、頂上直下の尾根道、急に空が曇りだし、雲がわきだし、霧が流れ出した。「寒いねえ」「早々に降りよう」と弱気になった。ま、こんな弱気、こんな恐怖感が安全登山かもね。昔なら、「これぐらい」「何を気弱なことを」と言っていたかも。尾根の岩場にへばりつくようにして建てられた小屋で少し休んで、早々に地蔵の頭から下った。赤岳の登山道、階段に、鎖に、梯子に、と丁寧な道がつけられ、補修がされている、これを掴んで上り下りをする限り、安全だ、ありがたいことだ。

◎行者小屋から地蔵の頭を登ってくる人もたくさんいる。「最新の天気予報 ご存じ」「今日は曇りで 明日は快晴らしいですよ」という返事。我々が大阪を出るころには、二日とも申し分のないいい天気だということだった。この八ヶ岳付近、いや全国的に、若い山愛好家が増えてきている、少し前までは、オジンオバンで溢れていたが、山にいる若者たち、素晴らしいことなり。だんだん下ると、樹林帯の中、濃い緑の針葉樹と赤黒い岩盤、そこにふわり白い霧、幽玄の世界だ。

◎福田語録：山から下りてきた人たちを見て、「みなさん いい顔をしている みなさん 満足そう」

◎赤岳を登って、テント場に帰りついたのがまだ3時、「ゆっくりシチューを煮込もう」と火に鍋をかけ、肉を入れた。800円で瓶ビールを一杯、こたえられませんか。

◎二日間の晩飯、一日目の豚肉はそのまま、二日目の牛肉はにんにくを入れて炒め、その二つを凍らせて持参した。一日目は、テントを張って、食事の用意、夕方近い時間でちょうどいい。まだ凍っている豚肉とキノコ類をうどんだして煮込んだ。途中でソバも入れた。イワシのトマト煮缶詰、豚大根煮缶詰、ピーナツにオカキなどである。二日目の牛肉は、心配をよそに、融けてるがまだ冷たい肉を煮込み、ニンジン、玉ねぎ、ジャガイモ、シチュースープを入れて煮込む。味が薄い。昨夜の和風だし、醤油、昨夜のそば用ソースに塩、と少しずつ入れる、「なんとかいけるじゃない」と舌鼓。昨夜同様、缶詰と乾きもの、重い食料品がどんどん消費されていく。アルコールは、500MLのペットボトルにそれぞれウイスキー、これまた二人で二日でペロリ、旨い、である。

◎暗くなって上を見上げると、赤岳に二つの小屋の灯りが見える。「あんな陰しいところ 岩にへばりついて 二つも小屋がいるのかねえ」なんて思いながら昔を思い出した。一度は上の小屋だと思いが、小屋開きの日に泊まった。ゴハンがごわごわに硬く、「こんなめしで 金をとるのかねえ」なんて思いながら酒を飲んでいた。もう一度は、梅田の飲み屋のおっさんが同道、我々はアイゼンとピッケルで登ったが、安曇野出身の彼は、黒い長靴に荒縄を底に巻き、紙袋に一升瓶をぶら下げて登っていた。どちらの時は忘れてしまったが、持参したワインの瓶を氷の上に置き冷やした記憶が残っている。彼以外に誰がいたのか忘れてしまったが、澤山さんはいつもいた、澤山さんは下戸だった。

◎三日目、6時前に起床、昨夜シラフに潜りこんだのが8時ころ、計算するのもおぞましいぐらいの長時間寝ている、睡眠誘導剤さまざまである。ふらふら起きだし、ぼ～っとまわりを見ると、霧が出ている、100M以上は見えないというような霧、気温もうすら寒い、長そでシャツに雨具の上着でちょうどどの暖かさである。

◎今朝はぐなしのラーメン、だんだん粗食になっていく。7:30 さあ出発、今日は硫黄岳である。「ええと 登り口は・・・」小屋正面の標識に、「硫黄岳」の矢印。霧がなかなか晴れてこない、陽の光はまったくくない、樹林帯の中、水滴がパラパラ来た、霧の水分が風で飛ばされたものらしい、雨ではなさそうだ、空は薄暗く、樹林帯の中は夕方のような薄暗さ、地面も草も湿って濡れている。今回は30分か40分で休むようにしている、これなら疲れない。昨日もいたが小さい鳥が逃げずに足元を這いまわる、スズメ大、緑がかったチャコールグレー、鳴かない。「ピーコちゃん」と話しかけるも素知らぬ顔。

◎硫黄直下の赤岩の頭あたりで、何人かの方が降りてくる、「すごい風ですよ」とほうほうのていで降りてこられる、「おお 例の風か」と岩を伝って上の方に行った。霧で何も見えない、祠と見まがうような小さい避難小屋、背の高いケルン、山頂の標識、火口には近づくと並んだ杭、そんなものしか見えない、せつくなのに硫黄岳の素晴らしい景観はまったく見えない。昨日の赤岳の景色はなんとか見られたが、ここがまったく見えないのは寂しすぎる、本当に残念なり、口で説明したところでその臨場感は味わえない、かえすがえすも残念なり。

◎思い出すのは、衣川・操・オレの3人でここを超えシラビソの小屋まで行ったときのこと。唐沢鉱泉で仲間と別れ、三人で登り始めた。天気の良い、季節の良い日だったと思うが、赤岩の頭を超えたあたりから風が出てきた。広い頂上はまさかの強風、這って、四つん這いでも飛ばされそう、テントを背負った重いザック、今も使っている紺色の雨具の膝がやぶれ手に少し怪我をした。頑丈なケルンを伝って、一つ一つ進んだ、まさに恐怖の強風の中、火口まで飛ばされず、なんとか進めた。もう少し強ければ何かの拍子に身体が浮いて飛ばされそうだった。下っていくと、道路を補修していた人が、「見てたよ 危なかったね」「あそこは 風のきついところなんだ」ということだった。手の傷は「まかして」と衣川さんが水で傷口を洗ってくれた。「傷は水で洗うのが一番」だそうだ。

◎テント場に近づき、川の流れる付近で、福田さんの顔写真を撮っていた。「よ～ おとこまえ」と通過するお姉さん連、青紫系の上着、なかなか絵になる風景だ、おとこまえだ、とカメラを覗きながら自賛。

◎テント場に帰り着き、残っているパン、水を飲んで、帰り支度を始める。オレのパッキングはいつも、まずシートを背中側に入れ、下に、テントとシラフを並列に並べる。これを押し込むのが一苦勞。次にその隙間にボンベや布類をねじ込む。衣服、雨具、コップ、を並べ、最後に柔らかい食料品を乗せる。帰りは重い食料品がなくなったぶん、荷は小さくなったが80Lのザックは相変わらずパンパンだ。12時ころに歩き出した。

◎パッキングが終わったころ、たくさんの人がやってきた、聞くと板橋の中高等学校の生徒30人と、引率の先生3人、「うわわ 大変ですねえ」「いやあ 楽しいですよ 小さいのはまだ12歳 パジャマ持ったか なんて ね」65歳の先生、山はベテランのようだが、もう体力がなくなって、少しの踏ん張りがきかない、と淡々。黒百合辺りから縦走してきたそうだ。オレも昔、登山靴を忘れ、革靴で黒百合から美濃戸口まで歩いたものだ。10時間近い行程を歩いてきた人たちもいた。硫黄のてっぺんでも、20人ほどを引率した、ツワーと思われる人たちが、風の中時計回りに赤岳の方に向かった。この程度の風なら大丈夫だと思うが。帰る屋頃に、霧も晴れ、予報通り天気は快晴になった。

◎石遊の湯を予定していたが、駐車場で、「モミの湯 500円だよ 安いよ」を紹介され、大いに汗を流して帰途についた。家に帰り着いたのは10時過ぎだった。